

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531128

研究課題名(和文) アメリカとコロンビアの連携事例による国際教育協力循環モデルの模索

研究課題名(英文) ALTERNATIVE WAY TO SUPPORT SUSTAINABLE QUALITY EDUCATION FOR ALL: A CASE OF CORROBORATION BETWEEN THE USA AND COLOMBIA

研究代表者

鈴木 隆子 (Suzuki, Takako)

九州大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：00437071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：今回の事例において、エスクエラヌエバのアメリカ事務所は閉鎖し、ニューヨークを基点とする国際的な出版会社の投資によるソーシャルビジネス化の動きは8か月の協議の末とん挫した。つまり、4年の間にアメリカとの関係の中で様々な動きはあったものの、ビジネス化はなかなかうまくいかなかった。そのため当初目的としていたこれをモデルとした教育開発モデルにはつながらなかった。しかし今後も教育支援するための投資を募り、質の高い農村教育を広めていくことは重要である。今回の経験から、賛同投資家の増加に貢献するため、新たな研究課題「途上国農村における初等教育の教育成果に関する調査 コロンビアでの追跡調査」が生まれた。

研究成果の概要(英文)：The branch office of Escuela Nueva in the USA was closed, and a project through the investment from an international enterprise based in the USA did not go well. In other words, all activities related to business did not work out. Thus I failed to establish a new model for educational development through business corroboration. However, it is important to gain investments from private sectors. New research project 'Education outcomes in primary schools in rural areas: Follow up studies in Colombia' was emerged out of this experience in order to convince more investors for education in developing countries for the expansion of quality education in rural areas.

研究分野：国際教育開発

キーワード：途上国の教育 国際教育協力 ビジネスモデル コロンビア エスクエラヌエバ 持続可能な発展

1. 研究開始当初の背景

開発途上国の農村の教育の前に立ちはだかる多くの壁の中のきわめて重要な障害のひとつは、貧困である。学校建設、教員訓練、住民参加による学校運営等の今日多く見られる教育政策はある程度は機能するが、貧困という壁に立ちふさがれて持続性をなくすケースが後を絶たない。反対に貧困を改善していくためには、教育は絶対不可欠である。このようなジレンマの中でこの問題を解決していくためには、教育を学校の問題だけに限定するのではなく、社会全体を見据えつつ農村開発全体を視野に入れていかなければならない。

現在、国際社会の中では一部の裕福な地域と多くの貧困地域が存在するが、この不均等を公正すべく国際機関・各国政府・民間を問わず、世界中で国際協力が実施されている。国際協力において、政府の ODA はその投入規模に対して必ずしも妥当な成果を得られていないことがしばしばある。それを補完すべく政府とともに、企業、NGO、大学などの市民団体等がパートナーとして有機的に連携し、進歩を遂げてきた。国際協力の方法論も、資金を提供する「資金協力」、技術を提供する「技術協力」、全体的な底上げを狙う「援助協調」「直接財政支援」、公正な貿易を通じて地元の経済の底上げを目指す「フェアトレード」等より効果的な国際協力モデルの構築研究がなされ、単なる授与関係から自助努力、持続的な発展というものが目指されて久しい。

一方、それぞれは非常に重要な役目を負って有意義な活動をしているのだが、投入に比較して成果の効率性が低くなりがちであることが課題でもある。中でも最も大きな問題は持続性である。社会はいろいろな立場の人々から構成されるので、それぞれが連携して相互補完と相乗効果を見出すことで総合的なアプローチが可能になり、より効果的な国際協力が可能になると考えられるので、社会全体を包括する国際協力の枠組みづくりが非常に重要かつ有効である。

2. 研究の目的

そこで当研究は、関係者や関係機関が対等に役割分担でき、それぞれの活動を他者にフィードバックできる国際協力における社会循環構造を構築することを目的とする。そのために政府、企業、NGO の持つ特性を分析し、それを踏まえた上でそれぞれの役割を特定し、関係するアクターによって循環されるサイクル的な「国際教育協力循環モデル(仮称)」を模索することが当研究の狙いである。そのためにそれを可能とする新たな国際協力のモデル化及び発展指標形成を目指す。

3. 研究の方法

具体的な調査方法は、この発想に一番近い取り組みであるアメリカとコロンビアの連携を事例として取り上げる。コロンビアのニュースクール(エスクエラ・ヌエバ)プログラムは、農村の貧しくて小学校にいけない児童に対して、安価な学校として複式学級を基本とする新しい学校制度を生み出し、質の高い公学校へのアクセスを高めてきた。しかし一方で慢性的な財源不足は避けられず、画期的な教育制度を生み出しても、学校運営が行き詰ったり、経済的理由で児童が退学せざるを得なかったり持続性を保つのに苦労している。さらに経済基盤の弱い僻地では就業が困難で、人々は生活のために村を捨てなければならない。

従来エスクエラヌエバはコロンビアの主力産業であるコーヒー産業と協力して学校運営に協力してきた。これにより子供たちは学校で実生活に根付いた有益で実質的な知識を身につけ、企業はコーヒーや他に関する知識・技能を身につけている質の高い労働力を確保する

ことができる。その結果、コーヒー生産の質や効率が高まり企業の利益に結びつく。それぞれの関係者が地域社会と教育を包括するサイクルの中でそれぞれ役割を分担し、それぞれが恩恵を受けているのである。その連携関係は国内だけにとどまらず、エスクエラヌエバは近年アメリカにニュースクール事務所を設置し、共生の輪を国際的に広げつつあった。そこで、コロンビアとアメリカの国際連携の在り方を調査する。

まず先行文献を中心に国際協力のメカニズムに関する理論を整理して当研究の理論的位置を確立する。そして二次資料による文献調査及びアメリカ渡航による現地調査を通じて、コロンビアの教育開発に関するアメリカの連携の在り方について調査する。さらにコロンビアに渡航し、実際の現場においてどのような教育支援活動を行っているのか調査し、コロンビアとアメリカの国際教育協力連携の現状把握を行う。

その結果に基づき、国際連携サイクルへの国際社会の経済システムや国際協力政策の関わりの可能性について検討しつつ、教育開発における「国際教育協力循環モデル(仮称)」の構築を目指す。

4. 研究成果

2011年に開設したエスクエラヌエバのアメリカ事務所は、すぐに閉鎖してしまっていた。また、2012年から始まったニューヨークを基点とする国際的な出版会社の投資によるソーシャルビジネス化の動きは、8か月の協議の末とん挫した。つまり、4年間の間に、アメリカとの関係の中でビジネス化への様々な動きはあったものの、全て軌道には乗らなかった。エスクエラヌエバは政府機関等にノウハウを提供するコンサルタント業務は請け負うが、様々な取り組みを行いながらもビジネス化はなかなかうまくいかなかった。

さらに同じコロンビアのグラミン系のソーシャルビジネスの動きも、食物や保健はある程度軌道に乗っていたが、教育はビジネス化が困難

であった。

その要因のひとつとして、教育の公共財的性質が挙げられる。教育の商品化及び顧客の開拓は困難である。ビジネス化にあたって対象物が必要であるが、学校や教科書等に潜在的な商品に限られる。食品等と異なり即効性に欠ける初等教育は、直接ユーザーからのデマンドが低い。また無償であることの多い初等教育への直接ユーザーからのビジネスニーズが低い。

次に、供給元であるエスクエラヌエバ基金がもともとNGOであるため、NGOマインドからビジネスマインドへのシフトという壁が挙げられる。またもともと利潤を追求する投資民間企業の思惑と、社会の公正を追求するNGOの信念の間にも隔たりが感じられた。

このような要因から、コロンビアのエスクエラヌエバでは教育へのビジネス支援はあまりうまくいかず、当初目的としていた教育開発モデルにはつながらなかった。

しかし、官民連携や民間との協働が主流の今、ビジネスではない形でも市場を意識しながら、素晴らしいプログラムであるエスクエラヌエバを支援するための投資を募り、質の高い農村教育を広めていくことは重要である。そのためにパートナーの一つである大学がすべきことは、エスクエラヌエバの教育成果を証明し、賛同投資家を増やすことであると結論に結びついた。そこから新たな研究課題「途上国農村における初等教育の教育成果に関する調査 コロンビアでの追跡調査」が生まれた。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

「ソーシャルビジネスをとりまく現状と大学に寄せる期待—コロンビアのグラミンカルダスを事例として—」『言語文化論究』第30号、九州大学大学院言語文化研究院 2013、109-117 頁。

〔学会発表〕(計 8 件)

2014年5月16-19日 “ALTERNATIVE WAY TO SUPPORT SUSTAINABLE QUALITY EDUCATION FOR ALL: A CASE OF COLOMBIA,” アジア比較教育学会(杭州師範大学)

2014年3月10-15日 “ALTERNATIVE WAY TO SUPPORT SUSTAINABLE QUALITY EDUCATION FOR ALL: A CASE OF COLOMBIA,” 58th Comparative and International Society of Education (トロント)

2013年11月30日-12月1日 “コロンビアのエスクエラヌエバの長期的な活動維持に関する展望” 国際開発学会第26回大会 (大阪大学)

2013年7月5-8日 “農村における質の高い教育を持続的に提供するための手法の模索—コロンビアのエスクエラヌエバとグラミンカルダスを事例として—” 第48回日本比較教育学会 (上智大学)

2013年6月24-28日 “ALTERNATIVE WAY TO SUPPORT SUSTAINABLE QUALITY EDUCATION FOR ALL: A CASE OF COLOMBIA,” 15th World Congress of Comparative Education Societies (ブエノスアイレス大学)

2012年6月24日 “持続可能な教育開発モデルの模索—コロンビアにおける現地調査2012に向けて—” 国際教育研究フォーラム (関西大学)

2012年6月17日 “持続可能な教育開発モデルの模索—ソーシャルビジネスの潜在的な可能性と課題—” 第47回日本比較教育学会 (九州大学)

2011年11月27日 “コロンビアのエスクエ

ラヌエバの長期的な活動維持に関する展望” 国際開発学会第22回大会 (名古屋大学)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木隆子 (SUZUKI Takako)
九州大学大学院言語文化研究院・准教授
研究者番号：00437071

(2) 研究分担者 なし
()
研究者番号：

(3) 連携研究者 なし
()
研究者番号：